

大東文化大学 東洋研究所所報

2010.12 No.54

目次

二つの「三国志」……………兼担研究員 渡邊 義浩 ……1	
公開講座「アジアの民族と文化」	
第1回講座概要 …………… 生田 滋 ……3	
第2回講座概要 …………… 片岡 弘次 ……4	
第3回講座概要 …………… 福田 俊昭 ……5	

〔研究員の著書紹介〕

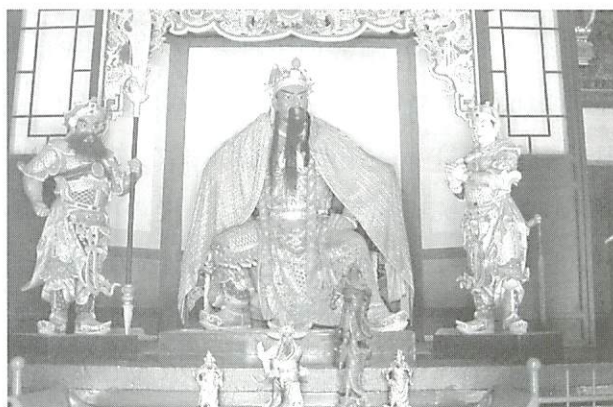
山下克明著『陰陽道の発見』……………小林 春樹 ……6
〔近刊紹介〕『天文要録』の研究(一)……………小林 春樹 ……6
東洋研究所刊行物……………7
新刊案内……………8

二つの「三国志」

東洋研究所兼担研究員 渡邊 義浩

中国の三国時代は、二つの「三国志」によって知られている。一つは、西晉の陳寿が著した史書の『三国志』、一つは、元末明初の羅貫中がまとめた歴史小説『三国志演義』(以下、演義)である。両者の違いは正統観にある。陳寿が踏襲した『史記』以来の紀伝体は、本紀と列伝により正統を示す。『三国志』は、魏書だけに本紀を設け、劉備・孫権を列伝に記すことで、曹魏の正統を明らかにした。同時に、後二者にも優劣が付けられる。曹操・曹丕の死を「崩」(『春秋』の筆法によれば、天子の死去)と表記することに対して、孫権の死は「薨」(諸侯の死去)と書いて、孫権が曹魏の臣下の諸侯であることを示す。その一方で、劉備の死は「殂」と記し、孫権より格上であることを示しているのである。

実は、孫権に止まらない。「殂」は『尚書』を典拠とする堯の死去の表現である。後漢は、堯の後裔として火徳を称していた。劉備の死を堯の典拠で記すことは、劉備を漢の正統後継者とすることになる。劉備の国家は、一般には「蜀」と呼ばれるが、蜀は地名であって、正式な国号は「漢」である。劉備は、曹丕が後漢の禪譲を受けたこと



関帝聖君(洛陽関林)

を認めず、自らが漢の正統を継承したことを国号に表現した。すでに「前漢」「後漢」という国号が使われていたので、「季漢(季は末っ子)」とも称している。ではなぜ、蜀と呼ぶのか。それは陳寿が、『三国志』の中に「蜀書」として、劉備の国家の歴史を記録したためである。表向きはあくまでも曹魏を正統とする。ではなぜ、季漢という国号であったことが分かるのか。それは陳寿が「季漢輔臣賛」という文章を蜀書の終わりに付けて、正式な国号を後世に伝えたからである。劉備が即位を天に報告した告天文は『三国志』に記されている。しかし、曹丕のそれは『三国志』には掲載されない。陳寿は、紀伝体を用いて形式的に曹魏の

正統を表現しながら、春秋の筆法や告天文の有無により、『三国志』に蜀漢の正統を潜ませているのである。

陳寿の思いを継承した者は、南宋の朱熹（朱子）であった。朱子の『資治通鑑綱目』は、曹魏の元号で三国時代を記す北宋の司馬光の『資治通鑑』を批判し、蜀漢を正統とする。演義は、朱子学を官学とした明清時代に成立した。その結果、演義は、正義であるはずの蜀漢が敗れていく「滅びの美学」を描く文学となった。このため日本でも中国でも「三国志」の知識は、演義が基本である。ただし、中国と日本では関羽への扱いが異なる。

演義の決定版は、清の中期、毛綸・毛宗崗父子が改訂し、批評を加えた毛宗崗本である。毛宗崗本は、「読三国志法（三国志の読み方）」の中で、奸絶（奸雄の極み）の曹操・智絶の諸葛亮とともに、義絶の関羽を演義の主役とする。演義は、羅貫中の原作に最も近いとされる明の嘉靖本（『三国志通俗演義』）から清の毛宗崗本まで、物語を書き改めながら完成度を高めてきた。その中で、最も手を加えられているものが、関羽像なのである。演義の諸葛亮を魔術師と批判する魯迅も、関羽像の表現を絶賛する。なかでも、かつて受けた恩に報いるため、赤壁の戦いに敗れた曹操を華容道で見逃す「義もて曹操を釈つ」は、関羽の「義」を描き出した最高の場面として極めて評価が高い。

演義が関羽の「義」を表現するため、さまざまな虚構を張りめぐらしているのは、明清時代における関帝信仰の広がりがある。唐代には仏教の伽藍神に過ぎなかった関羽が、神としての地位を飛躍的に高めていくのは、関羽の出身地である解縣の塩を取り扱う山西商人が中国を代表する商業資本へと発展していったためである。

元代には、塩池を涸らす蚩尤神と戦う「関雲長

（関羽）大いに蚩尤を破る」という戯曲が作られた。山西商人は、商売に成功すると関羽の廟を立て、劇を上演して、自らの守護神に祈願するとともに、その信仰を人々に伝えた。関羽は、こうして山西商人によって次第にその信仰を拡大し、国家や仏教伽藍の守護神だけではなく、富を招く財神となり、様々な威力を持つ神へと変容していく。明の万暦帝の時には、「三界伏魔大帝神威遠鎮天尊関聖帝君」との賜号を受け、道教世界の支配者としての地位に就く。清では、さらにその地位を高め、雍正帝は各地の関帝廟を「武廟」と呼ぶように命じ、孔子の「文廟」と並立させた。やがて、関羽は孔子と同じように「夫子」と称されるに至るのである。

演義は、こうした関帝信仰を背景に、関羽を義絶として描いたのである。横浜や長崎に関帝廟が鎮座するように、日本にも関帝信仰は輸出されたが、それはあくまで華人間のものに止まった。同じく演義を愛しながらも、日本において関羽が、曹操や諸葛亮と並ぶ主役として受容されないのは、関帝信仰を持たないためなのである。

◆筆者紹介◆

渡邊義浩（わたなべ・よしひろ）

1962年、東京都生まれ。

専門分野は中国古代史。文学博士。大東文化大学中国学科教授。「三国志学会」事務局長。

映画『レッドクリフ』日本語版監修。

『全譯後漢書』（汲古書院、2001年～、全19巻の予定）『三國政權の構造と「名士」』（汲古書院、2004年）『諸葛亮孔明—その虚像と実像—』（新人物往来社、1998年）『図解雑学三国志』（ナツメ社、2000年）など著書多数。

大東文化大学東洋研究所兼担研究員。

公開講座 「アジアの民族と文化」

2010年度（第26回）の東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに大東文化会館を会場として、下記の通り開催された。受講者総数は延べ108名（一般87名、教職員21名）で、各講座の概要は以下のとおりである。

なお昨年に引き続き、長年ご出席いただいた方3名に対して記念品を添えて表彰した。

◇第1回 11月11日（木）13：00～15：00 大東文化会館3階-K0302 研修室

テーマ：「海のシルクロード」と「邪馬台国」―「邪馬台国論争」に欠けた視点―

講師：生田 滋（大東文化大学名誉教授）

「シルクロード」と「邪馬台国」は、いずれもわれわれにとってなじみの深い歴史上の用語



である。しかし、この両者の間に関係があると考えられる人はまずいないのではなからうか。それはなによりもまず「シルクロード」は中央アジアを経由してユーラシア大陸の東西を結ぶ交易ルートで、その主たる商品が「絹」であったという先入観があるからである。しかし実は邪馬台国の時代には「シルクロード」は北インド地域がその交易の中心地であって、そこから東は中国、西は地中海世界に向けてそれぞれ陸路、海路を経由する二本の交易ルートが伸びていると考えられる。前者、つまり「陸のシルクロード」の終点は中国の長安、洛陽であり、また中国東北地方を経由して朝鮮半島がその終点となっていた。また後者、すなわち「海のシルクロード」は中国の広州、そして江南地方がその終点となっていた。さらに商品にしても、絹はじつは二の次で、最も重要なものは「金」だったのである。

ここで問題となるのは、この朝鮮半島と中国江南との間の交易関係である。朝鮮半島には中国東北部やシベリアで産出する金や毛皮がもたらされており、中国の江南地方には周辺の地域で生産される生糸、絹織物、真綿が集まっていた。これら

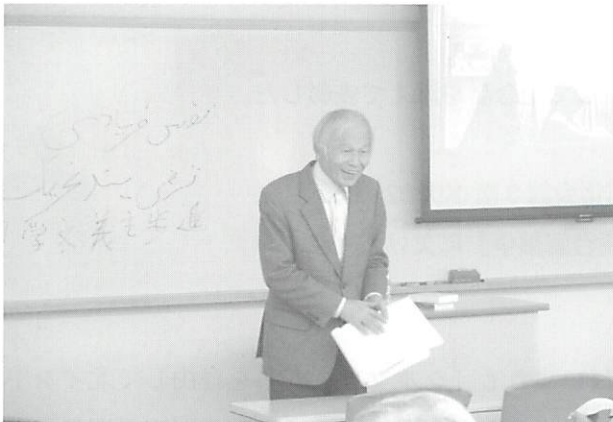
はいずれも「シルクロード」を経由して北インドに輸出される主要な商品であり、双方の間にたがいに相手の商品を必要としていたにちがいない。この両地を結んでいたのが中国の沿岸航路を経由する交易ルートであるが、それと平行して中国江南＝日本列島＝朝鮮半島という交易ルートがあったものと考えられる。紀元3世紀の中ごろに中国が分裂し、魏、蜀、呉の三国が分立するようになると、中国江南地方から沿岸航路を経由して朝鮮半島にいたる交易ルートが利用できなくなり、それに伴って日本列島を経由する交易ルートが重要になったものと思われる。「魏志倭人伝」に記録されている伊都国、狗奴国はいわばその交易ルート上に位置し、それぞれ帯方郡、呉の交易活動の最前線基地であったと考えることができる。「邪馬台国」も同様にこのルートの上にあった交会地であったが、いわゆる女王卑弥呼の時代にはすでに姿を消していたのではなからうか。



◇第2回 11月18(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階-K0302 研修室

テーマ：激動の20世紀とウルドゥー語詩人ファイズ・アハマド・ファイズ

講師：片岡弘次（東洋研究所兼任研究員，国際関係学部国際文化学科教授）



パーキスターンの詩人ファイズは1984年、73歳で生涯を終えた。その詩は英、独、仏などの言葉には勿論のこと、世界の各国語に翻訳されている。それはファイズの詩が自由を愛し、同胞の苦しみを表現し、飢餓や貧困、不平等をなくそうとし、社会の不正に抗議するものであるからであった。また新植民地主義に反対し、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ、パレスチナにおける被抑圧者や国を追われた者の苦しみを理解し、そういう人々のために歌った詩であるからであった。

ファイズは日本に3度来ている。2度目の時は、1981年川崎で開かれたアジア・アフリカ・ラテン文化会議の時で、この時は堀田善衛と25年来の旧交を温め、激動と革命に揺れたアジアの歴史を振り返り、文学者の役割を互いに語り合った。3度目はその翌年の82年、東京で開かれたアジア作家会議であった。ファイズは読売新聞のインタビューに答えて「詩人は直接、社会を変えることはできない。しかし民衆の意識改革を促すことによって、民衆が社会を変革していくことを手伝うことができる」と詩人と社会の関係を語った。

ファイズの詩作は学生時代に始まるが、ファイ

ズを目覚めさせたのは1930年代後半、インドを台風のように襲った文学運動、文学をもって古い社会を批判し、植民地からの解放を目指そうとする進歩主義文学運動であった。当時イギリスの植民地下にあったインドに、徐々に独立運動の気運が高まりつつあったが、ファイズは無気力になってしまった人々に近づく夜明けを語った。

1947年8月、インドはインドとパーキスターンに分離して独立した。しかし独立してみるとそれは待ち望んでいた夜明けでなかった。このような状況の中で、1951年ラーワルピンディー陰謀事件が起り、ファイズは首謀者と見なされ逮捕投獄。それ以来明日にも処刑されるかもしれないという4年半に渡る獄中生活はファイズの詩心を更に目覚めさせた。パーキスターンの政局は更に混迷し、軍事政権に突入。出獄後のファイズにはパーキスターンは居づらくなり、世界各地を放浪する身となった。1978年最後に行き着いた所が、パレスチナ解放闘争の本拠地ベイルートであった。

ファイズはその生涯で書いた詩はそれ程多くはなかった。しかしそれらはみな社会に対し発言しなければならない事が起きた時、書かれたものであった。



テーマ：詩仙李白の詩における種々の表現

講師：福田 俊昭(東洋研究所教授)



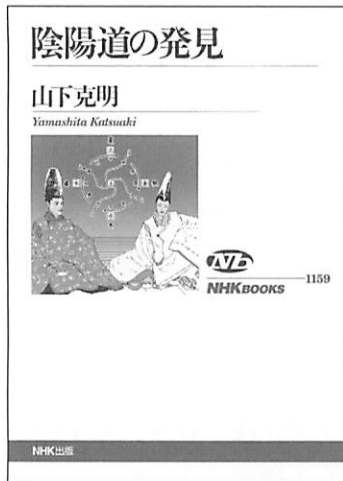
李白の詩は約1千首が現存している。その中には絶句・律詩を始め長短様様な詩があるが、就中、絶句が随一であるとの定評がある。本講座ではその絶句を抽出して、李白の詩仙たる所以の一端を講義することにした。

始めに李白の略歴を紹介し、その中で詩聖と称された杜甫との関係を述べた。次に李白の絶句が多様な表現を用いていることを知ってもらうために、絶句の作り方を頼山陽の俗謡を用いて紹介し、李白の詩の奇抜さを理解するための基礎知識を講義した。

本論では先ず「春夜洛城聞笛」の七言絶句を取り挙げた。この詩は一句から四句まで一貫した内容で“天衣無縫”の如き構成に特徴があることを講じ、第三句の「此夜曲中聞折柳」の折柳が「折楊柳」の曲の略であることをいい、折楊柳が古代の風俗習慣に基づいていることを説明し、李白ならではの構成であることを解説し、その後、洛陽の写真をスクリーンに投影した。次に「黄鶴楼送孟浩然之広陵」の詩を取り挙げ、先ず李白と孟浩然との関係を述べ、詩の第一句で出発地を、第二句で赴く到着地を、第三句第四句で孟浩然への無

限の友情を詠出する。特に第二句「烟花三月下揚州」の表現に注目し、烟は春霞、花は春花、三月は春で春尽しで纏め、更に揚州の揚も楊と通じ、楊は春芽吹く柳であり、一句全体を春で表現し、李白のすばらしさを解説し、この後、揚州の写真をスクリーンに投影した。次に「早発白帝城」の詩を取り挙げ、前詩と同じ構成法を用いていることを説明し、第二句「千里江陵一日還」に李白の心情を表現していることを解説する。即ち、千里の千と一日の一は正反対の数字で遠い距離を短時間で進んだことを表現していることを解説し、第三句「兩岸猿声啼不住」の猿声は古代から伝承されている断腸の故事を踏まえて、詩句に厚みを持たせていることを説明し、その後、白帝城の写真をスクリーンに投影した。次に「峨眉山月歌」を取り挙げ、絶句二十八字のうち、半数の十三字が感情を有しない地名に感情を持たせている。最後に「山中対酌」の詩を取り挙げ、第二句「一杯一杯復一杯」に注目し、漢詩で忌み嫌う同一文字を使用し、また第三句「我醉欲眠卿且去」は『宋書』の「陶淵明伝」の章句を引用し、天才詩人李白ならではの表現であることを説明し、講座を終えた。





『陰陽道の発見』
山下克明著
NHK ブックス
2010年6月刊

本研究所兼任研究員、山下克明氏の新刊書である。氏はつとに学位論文でもある『平安時代の宗教文化と陰陽道(おんようどう)』(岩田書店、1996年)を上梓されているが、本書はその成果を基礎としつつ新たな知見を加えたうえで、広い読者を対象として書き下ろされた教養書である。

—陰陽道は中国で成立した陰陽・五行思想に理論的な起源をもつが、実質的には、未然の吉凶や推移を知ろうとする占術・暦(れき)・天文などの技術＝〈術数〉に源を求めべきものである。それは、律令国家において〈術数〉を独占的に扱う役所であった陰陽寮を基盤として9世紀後半から10世紀、すなわち藤原氏による摂関政治が行われるようになった平安時代に成立した、以下のような特色を有する宗教であった。第1：日本在来のカミ・モノの崇(たた)りを恐れる天皇や貴族などの支配層を、それらの脅威から守る現実的な機能が期待された。第2：そのために、占術によって祟りの原因やカミの咎

としての凶事の発生を予測するとともに、それらを退けるための祓いや祭祀を行うことを重要な役割とした呪術宗教であった。第3：そのような陰陽道の担い手である陰陽師の職務も、①占術によって凶事の原因を探ること、②凶事を避けるための禁忌事項を事前に上申すること(＝「勘(かん)申(じん)」)、③呪術や祭祀によって実際に凶事を厭伏すること、の三点に収斂される。第4：要するに陰陽道とは、現世に生きる人の願望を満たすことを目的と機能とする、従って死後の展望や来世観を欠いた日本独自の宗教だったのである。—

以上のような基本的理解にもとづいて、著者は次の八章に分けて陰陽道の特色、その成立から確立までの経緯、支配層から民間への広がり、代表的陰陽師である安倍晴明の実像、およびその神秘化の実態と理由、さらには種々の立場から為された時代ごとの陰陽道批判に至るまで、広汎な問題について周到かつ平易に闡明されている。

- 序章 陰陽道とは何か
- 第一章 陰陽道の源流
- 第二章 陰陽道の成立
- 第三章 平安貴族と陰陽師
- 第四章 陰陽道の呪術と祭祀
- 第五章 賀茂保憲と安倍晴明
- 第六章 晴明伝承の成立
- 終章 陰陽道批判の系譜

冒頭に記したように本書は一般向け教養書として刊行されたものであるが、仏教や神道とは明確に異なる性格と機能を有する「日本独自の宗教」としての陰陽道の姿をとらえようとした意欲作であるとともに、専門的研究書としての水準をも保った好著である。

〔近刊紹介〕 『天文要録』の研究 (一)

唐の李鳳が撰した『天文要録』全五十巻は、緯書や種々の天文占書から多くの記事を採録している貴重書であるが、中国ではすでに唐代においてその伝本は途絶え、新・旧の『唐書』以下の「芸文志」や目録類にはその書名さえ著録されていない。

一方同書は、日本にはつとに伝来して天文を専門とする学生(天文生)の必読書に指定されるとともに、『三代実録』の貞観十八年(876)の条など、多くの史料にその書名を見出すことができる。さらに江戸時代の貞享三年(1686)には前田家第五代の当主である綱紀の命に

よって鈔本二十八冊が作られ、そのうちの二十六冊が現在も前田尊経閣文庫に所蔵されている。

本書はそのような『天文要録』の第一巻(尊経閣文庫本の第一冊)の原文を翻字したうえで、訓読文、現代語訳、そして語釈・参考資料を施すとともに、関連する論文一篇を付した、当該書に関する斯界初の専著である。なお今後、逐次残りの部分についても同様の検討と作業とを行なうとともにその成果を公刊して行く予定である。

【機関誌】

□東洋研究 第176号 (2010年7月25日発行)

福田 俊昭…『朝野僉載』に見える嘲諷説話
小林 春樹…『漢書』帝紀の著述目的—「高帝紀」から「元帝紀」を中心として—
兵頭 徹…海軍省調査課と嘱託の役割 (六)—海軍に正しい世界観を求めて—
松本 照敬…ラーマヌジャ思想の研究 (7)

□東洋研究 第177号 (2010年11月25日発行)

成田 守…『御船哥』について
安保 博史…几薫俳諧と李白伝説—几薫句「花火尽て美人は酒に身投げけん」考—
岡倉 登志…ラビンドラナート・タゴールの思想と行動—タゴール生誕百五十周年によせて—
大杉 由香…戦前日本における火災問題—過去の火災は現在に何を物語るのか—
小湊 浩二…戦後の公的職業訓練制度の確立とその諸問題—日経連と総評の動きから—

□東洋研究 第178号 (2010年12月25日発行)

小坂 眞二…御体御卜と陰陽道
中村 聡…中国近代化における西欧宣教師の影響—民主思想の紹介—
柴田 善雅…東満州産業株式会社と周辺会社の活動—「鮮満一体」経営を超えて—
岡崎 邦彦…1937年西北善後処理問題 (中)—南京側と西安側の交渉と内戦危機—
齋藤 俊輔…タウングー王朝とアユタヤ王国の抗争における火器の役割 (1498年 - 1605年)
新里 孝…ケアとく依存>

□東洋研究 第179号 (2011年1月25日発行予定)

大谷 光男…金印蛇紐「漢委奴国王」に関する管見
渡邊 義浩…王莽の革命と古文学
池田 雅典…光武帝の圖讖信奉
高橋 康浩…韋昭『漢書音義』と孫呉の「漢書學」
濱 久雄…清代における漢易の展開—惠棟の『易漢学』を中心として—

【刊行図書】

□昭和社会経済史料集成 第37巻 昭和研究会資料 (7) (2010年8月31日発行)

A5判 472頁 東洋研究所教授 兵頭 徹、大東文化大学名誉教授 大久保 達正・永田 元也 編集

□藝文類聚 (巻84) 訓讀付索引 (2011年2月10日発行予定)

B5判 東洋研究所教授 福田 俊昭 (代表) 他6名共著

□茶譜 巻3 注釈 (2011年3月25日発行予定)

B5判 東洋研究所兼担研究員 藏中しのぶ、東洋研究所教授 福田 俊昭 他著

□『天文要録』の研究 (一) (2011年3月25日発行予定)

B5判 東洋研究所准教授 小林 春樹 他著

◇東洋研究所事務室人事◇

西城 貞俊 2010年10月1日付 スポーツ振興課長に配置換え
山田 準 2010年10月1日付 事務長兼務
兵頭 徹 2010年11月1日付 事務長兼務
伊東 知子 2010年11月1日付 アルバイト採用

◇研究員消息◇

【訃報】

兼任研究員 (第9班共同研究班) の渡邊 信和氏 (61歳) が2010年12月10日に逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

新刊案内



『昭和社會經濟史料集成』 第37卷 昭和研究会資料 (7)
兵頭 徹・大久保 達正・永田 元也 編集
2010年8月31日発行/A5判 472頁/頒価¥7,000(税別)

昭和研究会は、後藤隆之助(1888～1984)主宰のもと昭和8年に発足した民間国策研究機関で、近衛文麿(1891～1945)のプレーン・トラスト集団である。政治、外交、経済、社会、教育、文化等の分野に当時一流の有識者が数多くの政策研究案を立案した。

《既刊》第1～30巻 海軍省資料(1)～(30) 第31～36巻 昭和研究会資料(1)～(6)

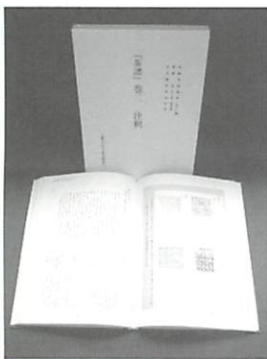


『藝文類聚』(巻83) 訓読付索引
大東文化大学東洋研究所『藝文類聚』研究班 代表 福田 俊昭
2010年3月25日発行/B5判 88頁/頒価¥5,000(税別)

『藝文類聚』は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。本書はその『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に重要語彙索引を掲載したものである。

巻83には、「寶玉部上」の寶 金 銀 玉 珪を収録している。

《既刊》巻1～巻16、巻80～巻82



『茶譜』巻2 注釈
藏中しのぶ・福田 俊昭・相田 満・安保 博史・矢ヶ崎 善太郎・渡辺 信和 共著
2010年3月25日発行/B5判 204頁/頒価¥7,000(税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

《既刊》巻1

☆この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■巖南堂書店

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-13-1
TEL (03) 3262-7234

■池上書店(大東文化大学板橋校舎内)

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1
TEL (03) 3932-7567

■汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4
TEL (03) 3265-9764

■進明堂(大東文化大学東松山校舎内)

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
TEL (0493) 34-4430

大東文化大学東洋研究所所報 No.54

2010年12月25日発行

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10

TEL(03)5399-7351 FAX(03)5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>

印刷 (株)東京技術協会